

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03478

研究課題名(和文) 教育空間におけるモノとメディア その経験的・歴史的・理論的研究

研究課題名(英文) Things and Media in Educational Space

研究代表者

今井 康雄 (Imai, Yasuo)

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：50168499

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,000,000円

研究成果の概要(和文)：理論的研究においては、「モノ」という視点が、現代的条件のもとで「経験」の可能性を構想し、ドイツ語圏の教育思想が構想してきた人間形成(Bildung)を起動させる上で、有効な手がかりとなることを確認した。経験的研究においては、現代美術と子どもたちとの関わりのなかで、既成の意味に解消できないような対象の物質性(「モノ」)が浮上する可能性があること、また、そのようなモノの次元は、それを意味の次元に還元しがちな鑑賞の場面よりも、美的な制作の場面で経験される可能性が高いことを明らかにした。

以上の研究成果は、海外研究者8人を含む17人が寄稿した研究成果報告書(全355頁)にまとめた。

研究成果の概要(英文)：Our research project can be divided into two parts: theoretical and empirical. Theoretically, we clarified the educational significance of the perspective of "Things." It gives a robust supporting point for children to get an "experience" under the contemporary social and technological conditions and, therewith, to walk in the process of the "Bildung" which has been conceptualized in the educational thoughts in German speaking areas. In the empirical studies, we found out that (1) the materiality of objects, which is not to be exhausted in any existing meanings, could be experienced by the children in their confrontation with contemporary arts, and that (2) such experience can likely be introduced in their activities of aesthetic re-creation, rather than those of appreciation.

Our research findings are published in a report with 355 pages, in which 17 researchers (including 8 foreign scholars) gave their contributions.

研究分野：教育哲学・教育思想史

キーワード：モノ メディア 人間形成論 美術教育

1. 研究開始当初の背景

教育が主に人と人との関係として営まれていることは言うまでもない。しかし、教育的コミュニケーションにおいては、意図的に構築された教育空間とその物質的条件(モノとメディア)が重要な役割を果たすことになる。近年、そうした物質的条件からの教育の捉え直しを促すような研究動向が顕著に現れている。

ドイツ教育学では、学界を代表する専門誌が最近相次いでモノをテーマとする特集号—『教育学雑誌(ZfP)』の特別号「教育の物質性—教育的対象の文化的・社会的諸側面」(58. Beiheft, 2012)、『教育科学雑誌(ZfE)』の特別号「人間とモノ—教育過程の物質性」(Sonderheft 25, 2013)—を編集している。

こうしたドイツ語圏の議論において少なからぬ役割を果たしているのが、フランスの科学社会学者ラトゥールの「アクター・ネットワーク理論(ANT)」である。ANTは、主体/客体の区別を前提とせず人とモノとが一体となって振る舞うようなアクターを想定する。ANTは、*Educational Philosophy and Theory* 誌が“Actor-Network Theory in Education”を特集に組んでいるように(Supplement 1, 2011)、英語圏の教育研究にも導入されつつある。

2. 研究の目的

本研究は、以上のような教育の物質的条件への関心の高まりという理論動向に配視しつつ、美術教育の領域をフィールドとして経験的・実験的調査を行うことで、モノが、教育空間において、また子どもたちにとって、どのような意味を担っているかを具体的に解明することを目指した。

3. 研究の方法

A. 理論的研究

国際的な研究動向と歩調を合わせるために、本研究では、かなり頻りに海外からのゲストを招いて研究会を開催した。とりわけ注目したのが、ドイツ語圏で展開されてきた人間形成論(Bildungstheorie)の新たな、教育の物質的条件に焦点を合わせようとする動向である。こうした研究交流の集大成として、2017年3月に国際シンポジウム「教育空間におけるモノの意味」を開催した。

B. 経験的研究(フィールドワーク)

理論的研究と並行して、美術教育をフィールドとする経験的・実験的な研究を行った。具体的には：

- (1) 東京都現代美術館でのギャラリー・トークの際に収集された小学生の感想文1,000点以上を調査し、現代美術との子どもたちの取り組みについて仮説を構築した。
- (2) 現代美術館および台東区立蔵前小学校

と協力して、現代美術館で行われた特別展示「紙の仕事」を訪れた小学校6年生に展示をモチーフとして作品制作を試みてもらい、その制作の過程を記録し分析した。

- (3) さらに、この分析結果を、単に通常の研究論文として発表するのみならず、イラストレータや美術家と協力してヴィジュアル化・作品化し、東京藝術大学で行われた研究会で展示した。またその成果について討論会を行なって検討した。

4. 研究成果

A. 理論的研究においては、本研究は「モノ」という視点が、現代的条件のもとで「経験」の可能性を構想し、ドイツ語圏の教育思想が構想してきたような意味での人間形成(Bildung)を起動させる上で、有効な手がかりとなることを確認した。

B. 経験的研究においては、本研究は、現代美術と子どもたちとの関わりのなかで、既成の意味に解消できないような対象の物質性(「モノ」)が浮上する可能性があること、また、そのようなモノの次元は、それを意味の次元に還元しがちな鑑賞の場面でも、美的な制作の場面で経験される可能性が高いことを明らかにした。

以上の研究成果は、海外研究者8人を含む17人が寄稿した研究成果報告書(全355頁)にまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計16件)

1. 今井康雄「経験の貧困と教育の未来」『思想』1113, 2017, 2-5.
2. Yamana, Jun, Hiroshima als architektonischer Raum der Erinnerung, *Jahrbuch fuer Historische Bildungsforschung*, 22, 2017.
3. 今井康雄/山名淳/小松佳代子/池田全之/眞壁宏幹 / 郷泰典 / 堀江美由紀「教育空間におけるモノとメディア—現代美術の経験を手がかりとして」『教育哲学研究』115, 2017, 119-125.
4. 今井康雄「芸術教育の可能性—予備的考察」『子ども学論集』3, 2017, 1-25.
5. 今井康雄「自然主義と教育の間—教育における自然主義の限界」『近代教育フォーラム』26, 2017, 42-45.
6. Komatsu, Kayoko, Genealogy of self-expression: a reappraisal of the history of art education in England and Japan, *Paedagogica Historica*, 53, 2017, 214-227.
7. Komatsu, Kayoko, Art Education as Folding and Unfolding of Things, *Journal of Education and Training Studies*, 5, 2017, 101-105.

8. 池田全之「自己保存を肯定する共同性構築は可能か—スピノザの共同性思想と相互承認論の可能性」『教育哲学研究』116, 2017, 40-59.
9. 山名淳「ビルドゥングとしての『PISA後の教育』--現代ドイツにおける教育哲学批判の可能性」『教育哲学研究』116, 2017, 101-118.
10. 山名淳「<教育的保護>とその現代的問題状況--アーキテクチャ論の観点から」『教育科学セミナー』47, 2016, 19-30
11. 池田全之「永遠の相における観照と至福—スピノザにおける個物と無限なものとの関係について」『教育思想』43, 2016, 1-19.
12. 池田全之「自己形成の基礎づけから見えるもの—フィヒテの自我哲学の帰趨から考える」『理想』697, 2016, 68-81.
13. 今井康雄/渡辺哲男/柴山英樹/小松佳代子/眞壁宏幹「教育活動における言葉とモノ」『教育哲学研究』113, 2016, 146-152.
14. 今井康雄/山名淳/小松佳代子/池田全之/眞壁宏幹「モノの教育的意味—思想史的接近の試み」『近代教育フォーラム』24, 2015, 156-162.
15. 今井康雄「教育にとってエビデンスとは何か—エビデンス批判をこえて」『教育哲学研究』82, 2015, 2-15.
16. 小松佳代子「『美術教育研究』の課題と展望—機関誌の19年をふりかえる」『美術教育研究』20, 2015, 88-97.

〔学会発表〕(計10件)

1. 今井康雄 / 小松佳代子 / 山名淳 / 眞壁宏 / 池田全之, 「教育空間におけるモノとメディア」日本教育学会大会, 2017.
2. 小松佳代子「パピエ・アトラス展示発表」美術教育研究大会, 2107.
3. Komatsu, Kayoko, “Qualitative Intelligence and Art Education: The possibility of Arts-based Research”, InSEA Congress 2017, 2017.
4. Yamana, Jun, “Stadt Hiroshima als architektonischer Raum der Erinnerung: Zur Problematik der Pädagogisierung des geschichtlichen Ortes”, Deutsche Gesellschaft für Erziehungswissenschaft, 2016.
5. 今井康雄/山名淳/小松佳代子/池田全之/眞壁宏幹 / 郷泰典 / 堀江美由紀「教育空間におけるモノとメディア—現代美術の経験を手がかりとして」教育哲学学会大会, 2016.
6. 今井康雄「人間教育としての芸術教育の地平」全日本音楽教育研究会大学部会(招待講演), 2016.
7. 小松佳代子「子どもはみんなアーティスト—教師もみんなアーティスト」長野県美術教育研究会総会(招待講演), 2016.
8. 今井康雄/渡辺哲男/柴山英樹/小松佳代子/眞壁宏幹「教育活動における言葉とモノ」教育哲学学会大会, 2015.

9. Komatsu, Kayoko, “The Genealogy of Self Expression: A Comparative History of Art Education in England and Japan”, The European Conference on Educational Research, 2015.
10. 山名淳「<教育的保護>とその現代的問題状況」関西大学教育学会, 2015.

〔図書〕(計13件)

1. 今井康雄編『科学研究費助成事業(基盤研究(B))成果報告書—教育空間におけるモノとメディア—その経験的・歴史的・理論的研究』, 2018, 355p.
2. 小松佳代子編『美術教育の可能性—作品制作と芸術的省察』勁草書房, 2018, 262p.
3. Imai, Yasuo, (Un-)Zeigbarkeit der Realität als Aufgabe der Pädagogik. Aus den Erfahrungen vor und nach „Fukushima“, Wigger, Lothar / Platzer, Barbara / Buenger, Carsten (eds.), *Nach Fukushima? Zur erziehungs- und bildungstheoretischen Reflexion atomarer Katastrophen. Internationale Perspektiven*, Klinkhardt, 2017, 54-76.
4. Yamana, Jun, Günther Anders in Hiroshima. Überlegungen aus einer gedenkstättenpädagogischen Perspektive, Wigger, Lothar / Platzer, Barbara / Buenger, Carsten (eds.), *Nach Fukushima? Zur erziehungs- und bildungstheoretischen Reflexion atomarer Katastrophen. Internationale Perspektiven*, Klinkhardt, 2017, 141-150.
5. 今井康雄「アート教育カリキュラムの創造—ひとつの予備的考察」『岩波講座・教育—変革への展望—第5巻—学びとカリキュラム』岩波書店, 2017, 209-240.
6. 山名淳 / 矢野智司編『災害と厄災の記憶を伝える—教育学は何かができるか』勁草書房, 2017, 337p.
7. 小松佳代子「芸術体験と臨床教育学—ABR(芸術的省察による研究)の可能性—」矢野智司・西平直編『臨床教育学』協同出版, 2017, 139-16
8. 眞壁宏幹編『西洋教育思想史』慶應義塾大学出版会, 2016, 688p.
9. 今井康雄『メディア・美・教育—現代ドイツ教育思想史の試み』東京大学出版会, 2015, 433p.
10. 山名淳『都市とアーキテクチャの教育思想—保護と人間形成のあいだ』勁草書房, 2015, 256p.
11. 池田全之『ベンヤミンの教育思想—危機の思想と希望への眼差し』晃洋書房, 2015, 265p.
12. 今井康雄「教育学の課題としてのリスク—福島第一原発事故以後の展望」小笠原道雄編『教育哲学の課題』福村出版, 2015, 160-184.

13. 山名淳『『陶冶』と『人間形成』 ビル
ドゥング(Bildung)をめぐる教育学的な
意味世界の構成』小笠原道雄編『教育哲
学の課題』福村出版, 2015, 203-220.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今井 康雄 (Imai, Yasuo)
日本女子大学・人間社会学部・教授
研究者番号: 50168499

(2) 研究分担者

池田全之 (Ikeda, Takeyuki)
お茶の水女子大学・基幹研究院・教授
研究者番号: 50212775

小松(児美川)佳代子 (Komatsu(Komikawa),
Kayoko)
長岡造形大学・准教授
研究者番号: 50292800

眞壁宏幹 (Makabe, Hiromoto)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号: 90229328

山名淳 (Yamana, Jun)
東京大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 80240050